鎧橋随想

夢＆希望

ベストコモディティ社長
正田　謙一

経済戦略会議の議長であった樋口廣太郎氏は、私の履歴書で「夢が必要だ。夢や希望がなければ意欲はわかない。夢が国民のエネルギーになり、国の発展の原動力になる」と述べておられました。歴史を紐解けばアレキサンダー大王は東洋へ世界へと大遠征する前に財産や宝を全部部下に与えてしまった。臣下のひとりが不思議に思い大王に尋ねたところ、「私の秘蔵の宝はまだ手元に残してある。その宝の名は〝希望〟という。この宝以上の宝はないのだ！」と答えたそうです。即ち、希望は、人生の最強にして最大の武器であり、希望さえあればそこから一切が生まれる。希望こそがいわば「打ち出の小槌」であることを物語っている。

今回のサッカーのワールドカップは、不況で喘ぐ我々日本国民に夢と希望を与えてくれたように思います。夢や希望を持ち続けることが人間にとって、また、企業や国にとって、いかに重要であるか教示していると私には思えてなりません。

「一年の計は、穀を植うるにあり、十年の計は木を植うるにあり、百年の計は人を植うるにあり」と管子にありますが、私はこれからもこの言葉を我が信条として、自分の夢を実現するために挑戦し続けて参る所存です。

相場が肌に合っている

日商岩井フューチャーズ社長
木嶋　正憲

1971年、日商岩井に入社、非鉄部門に配属され、銅の原料を担当しました。最初の仕事はお客の注文をLME（ロンドン金属取引所）につなぐことで、以来、相場がDNAの中に組み込まれてしまいました。

当時はロンドンにお客からの注文を出して帰宅。翌日、会社に出てくると成約できたかどうかが分かるという、極めておおらかな時代でした。いまは深夜まで残って注文を出しており、体力的に相当、きつくなっています。

勝負事ではかつては麻雀をよくやりました。麻雀は勝負感を養うのに向いています。相場はよくファンダメンタルによるといわれますが、私は心理作戦だと思っています。「マーケットのセンチメントがどちらに向かうか」、それを探るのが面白い。その意味では商品先物業界は肌に合っており、好きなことで仕事ができるのはハッピーです。

もっとも、社長となると、会社の収益を上げなければならず、そうもいってばかりはいられません。手数料の完全自由化が控えているからです。ただ、手数料収入が減っても、プレーヤーを何十倍にも増やせばよい。問題点を取り除けば、そのように大きく発展する可能性はあると思っています。

夢は「先物大学校」

ひまわりCX社長
犬嶋　隆

この業界に入って早いもので30年近くになります。この間、無我夢中で過ごしてきましたが、一ついえることは先物の仕事は大変ダイナミックで面白いということです。業界では毎年多くの新入社員を迎えますが、先物の面白味にもすばらしさにも出会うことなく辞めていってしまう人が多いのは、とても残念です。

私には「先物大学校」の創設という夢があります。これは、10年以上前に研修でシカゴの先物取引所や先物会社を訪ねた際、そこで働く人達のバイタリティーと仕事に対する誇りに大変感動したことから生まれました。その時知ったのは、彼らがこんなに生き生きしているのは、「フューチャーズ」が大好きであるからだということです。このとき私は、先物業界の更なる発展のためには、わが国でも多くの人にこのビジネスを好きになってもらい、そういう人達を大勢迎え入れる必要があると考えたのです。

先物大学校で学び、このビジネスが好きになった若い人達をわが業界で受け入れ、またそういう人材を他の金融業界にも広げていくことを想像すると胸が躍ります。そしていつかは必ず実現させたいという思いを強くする次第です。

業界ロゴの選定を

岡安商事社長
岡本　安明

商品先物業界は業界内の団体ごとに広報活動を行っている。それでは、団体の枠内にとどまるきらいがある。各団体が予算を持ち寄って、業界全体を踏まえた形で、PRに取り組むことがあってもいいと思う。

ちなみに、日本商品先物振興協会の今年度予算は七億円で、うち三億三千万円が広報活動費だ。東工取先物市場振興協会は四億円のうちの二億五千万円をそれにあてている。

いずれの例でみても、広報活動費は決して少なくない。だが、大きな他業界の団体などと比べた場合、かなり見劣りする。限られた予算をより効果的に使う、広がりのある広報活動を行うには、やはり協力が欠かせない。

いまはイメージを大切にする時代だ。新時代の商品先物業界にふさわしいロゴタイプ、キャッチコピーが欲しい。専門家に制作を任せるのもいいが、公募するのも一案だ。業界団体が集まっての仕事にするのはどうだろうか。

商品先物業界の将来のことを考えると高校と大学生へのアプローチも大切だ。もちろん、先物協会もこれまで各種事業を続けている。協力して別途に予算をねん出し、広く議論すれば、また新しい切り口が捜せるかもしれない。

拝見・正紀幼稚園
スリランカと日本のかけ橋

カネツ商事相談役
清水　正紀

インド洋上に浮かぶ西洋梨の形をしたセイロン島からなるスリランカ。正式にはスリランカ民主社会主義共和国。首都は1985年にコロンボから郊外のスリ・ジャワダナプラ・コッテに遷都された。

この長々しい新首都の近くに「正紀幼稚園」（SEIKI PRE-SCHOOL）が誕生したのは93年12月4日のこと。カネツ商事の創業者の名を冠するこの幼稚園ができるきっかけは2人の僧侶のとりもつ縁だった。

清水家の菩提寺である茨城県大洗の願入寺の大網義明住職はスリランカのサマランシ師と親交があった。大網住職は東京都知事選に打って出たこともある硬骨漢だが、スリランカに幼稚園が不足していると訴えられ、数ある檀家の中から義侠の気風を見込んで正紀会長（現相談役）に話が持ち込まれ、一気に実現する運びとなる。

開園式には正紀会長の名代として清社長（現会長）が臨み、大統領をはじめ文部大臣、国会議員、知事など列席するものものしさの中で、一場のスピーチを試みた。

「子供は大いなる好奇心の持ち主で、無限の可能性を秘めた科学者の卵であり、また大冒険家であります。21世紀は汚染された地球であってはなりません。飢餓に苦しむ人がいる地球であってはなりません。紛争、戦争の続いている21世紀であってはなりません。この幼稚園がスリランカ共和国と日本のかけ橋になってほしいものです」

スリランカは教育熱心なお国柄で文盲率も低い。この正紀幼稚園への入園希望者は年々増えているという。

正紀幼園の開園式の当日

右からスリランカ大統領、大網願入寺住職、清水清氏

サンワード、日産を破る
第73回都市対抗野球

第73回都市対抗野球の第3日の1回戦、東京ドームでサンワード貿易（札幌市）は優勝候補筆頭の日産自動車（横須賀市）を3対2で破った。試合はサンワード優勢で進み、2対0とリードしたが、日産が7回に追い付き、白熱戦となった。9回高梨の本塁打で勝ち、大番狂わせを演じた。

サンワードの菅野副社長（野球部長）は試合前「うちは負けてもともと、相手は勝って当たり前、そこにわずかな勝機があるかも知れない」と話していたが、創部5年目の新興チームが古豪を降す快挙となった。

サンワードは2年前、初出場で同じ日産に2対17の大差でコールド負けを喫しており、この2年間でのサンワードの戦力強化ぶりが目をみはらせた。先物業界からも大勢応援に駆けつけた。

盛り上がる応援団席とスコアボード

◆事務局だより◆

当先物協会が入居しております安田生命鎧橋ビルの名称が9月1日より左記のとおり変更となりました。お手間を取らせて恐縮ですが、お手元にございます名簿等をご訂正下さいますようお願い申し上げます。

新ビル名称：
小網町安田ビル
（なお、番地、入居フロアー、電話番号、FAX番号に変更はありません。）

証言・戦後先物史
東工取繁盛記（4）

東京工業品取引所特別顧問　間渕　直三

石油製品の上場

石油製品の上場御祓神事

――いま東京工業品取引所は全国七取引所のうち、出来高はナンバーワン。そのきっかけとなったのが金なら、総仕上げをしたのが石油製品だと思います。

間渕　「金の次は原油」とは当初から頭の中にありました。といっても、原油は日露戦争での二〇三高地のようなもの。メジャーの本丸なので、抵抗が激しいと思い、まず、周辺を攻めることが必要と考え、ガソリン、灯油に的を定めました。

――なぜ、ガソリン、灯油だったのでしょうか。

間渕　ガソリン、灯油は国内で販売されており、戦略商品である原油とは異なり、普通の商品です。そこで、メジャーの手の及ばない販売部門から攻めることにしました。特にガソリン、灯油は消費者向けなので元売りは末端まで支配できず、元売りはあまり強くなかった。まず、守りの弱いところから崩そうという作戦でした。

通産省にいた時、外貨統制の時代に輸入一課に在籍、原油の輸入割当て業務も行い、多少の〝土地勘〟があったことも一因です。

――石油業界といえば、統制色が強い業界です。当然、抵抗も大きかった？

間渕　スタンド一カ所つくるのも許可制でしたからね。でも、国際化が進み、役所も統制色をなくすのに抵抗できなくなっていました。業界ではエッソ石油の八城政之会長に上場の話をしたら「蟷螂の斧」といわれました。私もそのころはそう思っていました。

――石油といえば、日本経済新聞の一面を使っての大広告がいまも、業界の語りぐさになっています。

間渕　「日本のガソリン価格は果たして適正といえるでしょうか」という、あの意見広告ですね。当時、日本は原油の輸入価格が海外諸国に比べ一バレル当たり一ドルも高かったし、統制で精製会社が努力しなくてもつぶれない体制にありました。設備は許可制だったので、「多く枠を取ろう」と、必要がなくても設備をつくり、過剰設備になっていました。そのような仕組みを壊す必要もあると考えたから上場を推進しました。

――反応は？

間渕　通産省には文句があったと聞きましたが、私にはだれも文句はいってこなかった。ただ、石油精製業界に目の敵にされ「これで、原油の上場はなくなった」といわれましたよ。

（つづく）